混合(中)

　　Puney　Loran Seapon

【前回のあらすじ】

奈津美「『混合(上)』を読めば、全部分かるでしょ」

　康介「ちょ……奈津美、それは適当すぎなくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」

奈津美「生意気な声は、この口から聞こえてくるのかしら？」

　康介「やめ……にゃ、にゃにをそんにゃに苛立っているんだい？」

奈津美「あら、苛立ってるなんて……そんなことないわよ？　別に前回の【登場人物】の所で、私だけ名前すら出して貰えなかったことなんて、全然気にしてないし……ねっ！」

　康介「ぎゃー！　ちょ……そんな所抓らないでぇ！　てか、仕方なかろう。この間は話の中に出てこなかったんだから！」

奈津美「だから、気にしてない！」

　康介「では、その手に持っているものはっ？」

奈津美「あんたの悲鳴が、話の幕開けの合図よ！」

　康介「きょ……きょえー」

弾丸(？)

　やばい。

　俺は咄嗟に、ドアの覗き穴から目を離す。

「せんぱーい。いますよねー？」

ゴンゴンと扉を叩く音に続けて、どこか面白がっているような声が聞こえる。なぜこいつがここにいるのか、俺には理解出来なかった。心臓が胸を叩くのが痛くて堪らない。確か、住所を教えたことは無かったはずだ。

居留守を使うか？

そう思った俺だが、慌てて首を振る。不本意ながら、殺し屋故に気配を消すことは得意ではあるものの、今の口ぶりから察するに、もう俺がここにいることはバレている。声が聞こえたタイミングから見ても、最早それは明らかだろう。ならば、変に隠れて不信感を募らせるより、さっさと出た方が得策だ。たとえそいつが、警察関係者だとしても。いや、警察関係者だからこそ、怪しい行動は慎むべきか。それに、こいつなら最悪、ドアを無理矢理こじ開けかけない。

一秒でそう決断した俺は、ほんの少しだけドアを開け、顔を出す。白衣を着た男が、そこに立っていた。

「あっ、先輩！　ご無沙汰してます！　僕の事、覚えていますか？」

「……久しぶりだな、藤二」

「ははは、嫌ですね先輩。ちゃんと『ＴＯＵＪＩ』って呼んでくださいよ」

　こいつは、俺が昔アルバイトをしていた頃に出来た後輩で、古谷藤二だ。当時、藤二は確か高校生だったと記憶している。大学も、俺と同じ所に入ったと思う。後輩といっても、俺が先輩風を吹かせられたのはたった半年だ。それからは、こいつにどこか小馬鹿にされているような感覚を、俺がアルバイトを止めるまでたっぷり味わう羽目になった、という苦い思い出がある。

「……何の用だ？」

　さっきの訳の分からない発言も、あの頃からちっとも変わっていない。面倒くさいのでスルーして、俺は用件を尋ねる。藤二は今、警察のはずだ。白衣を着ているが、一体どこの部署だろう？　この間、テレビのニュースに藤二が出ていて驚いたのは、俺の記憶に新しい。

　だが、面倒くさいと思うのと同時に、俺は動揺を隠すのに必死だった。最後に会ったのが何年前だったか忘れたが、そんな奴に、まさかたいした用も無いのに会いに来たわけではあるまい。都合の悪いことに、相手は警察で俺は殺し屋だ。こいつが来た目的はこの件についての事で間違いないはずだ。

　刑事が訪ねてくることは偶にあるものの、こんなに動揺することは無い。発言にちょっと気をつけるだけで、すぐ帰ってくれるからだ。だが、相手は藤二。こいつは異常なまでに勘が鋭いので、受け答えは勿論、一挙一動にまで気を配る必要がある。

　勿論、俺には藤二を忘れた振りをする選択肢もあったが、俺はそれをしなかった。ポーカーフェイスには自信があるものの、さっきドアを開けたとき、一瞬顔に出ていた気がするからだ。

「大した事じゃないんですけど、先輩、今ちょっとお時間よろしいですか？」

　藤二は、にこやかに俺に聞くものの、既にドアの端に手を添えていて、俺が「暇じゃない」と言って即座に戸を閉めることを防いでいた。

「ああ」

　だが、俺はそう言って戸を大きく開け、藤二を招き入れる。適当な事を言って追い返しても良かったが、多分こいつは後でまた来るだろう。ならば無駄に時間をかけるよりも、いっそ今家に入れて、言葉巧みに丸め込んでしまう方がいい。

　それにしても、と俺は藤二を奥に通しながら考えを纏める。

　一体、こいつは俺が殺し屋であるという疑いをどこで持ったのだろうか。今訪ねてきたということは、おそらく最近の事件で何か見つけたのだろうが、証拠の後始末はきっちりやったはずで、さらにおっさんの手回しも万全だ。監視カメラに撮られるなんてヘマは絶対していないと断言できる。

　藤二を家に入れた俺は、お茶の用意をしながら、ここ数ヶ月にした仕事を脳内でピックアップしていた。だが、どれも明確に思い出せるものの、現場に証拠を残すような事をした覚えはない。ならばここ一年以内の仕事だろうかと思ったが、流石に記憶に曖昧な所がある。それでも、はっきりと覚えている範囲では、特に疑われるようなものを残した覚えは無い。

　ここら辺は、藤二の話を聞いて、対処法を考える必要がありそうだ。

「で、何の用だ？」

　お茶をテーブルに置きながら、俺は早速聞く。久しぶりに会った相手なら、普通は世間話の一つでもしてから用件に入るべきだろう。とは言え、あまり長居して欲しくないのも事実。殺し屋であることがバレるからとかではなく、純粋に俺はこいつにあまりいい思い出が無いからだ。

「……先輩に、見て欲しいものがあるんです」

　この私情は、藤二にも伝わったのだろう。苦笑いをしつつ、俺の出したお茶を一口飲むと、懐から二枚の写真を取り出した。

　それを見て、俺の心臓はドキンと跳ねる。青ざめかけた顔を何とか元に戻すと、俺は首を傾げた。

「……誰だ？」

　そうきたかと、俺は心の中で頭を抱える。

　写真に写っていた人物は、さっきおっさんに『今回のターゲット』として依頼された、須藤響一郎と天瀬響花だったからだ。

　こいつについては、これから調べる予定だったので、今俺の元に、ほとんど情報が無い。彼女達について知っているのは、俺がアパレル会社の社長を殺した時の、目撃者の可能性を否定できないことくらいだ。後は、おっさんから聞いた話が、少しあるくらいである。

　もし彼女達の内、殺人犯の方が既に捕まっていて、俺のことを話していたならば、その時はどうしようもない。現時点では証拠は何も無いが、こいつなら、何か適当な理由をつけて家宅捜索しかねないからだ。そうなれば、この部屋の押し入れの奥にしまってあるライフルなど、すぐに見つかってしまうだろう。銃刀法違反で、俺は逮捕される。その後どうなるかは、言わずもがな、だろう。

「実は僕、今は科捜研で働いているんですよ」

「へぇ」

　そう呟きながらも、俺はおやっと思った。科捜研に、警察官のような権限があったという記憶は無い。写真なんか見せるから、この流れ的にてっきり捜査一課の刑事かと思ったのだが、どうやら違うらしい。ならば、この写真を見せてきたのはどういう目的なのだろうか。

　そう思う一方、俺はまだ油断していなかった。こいつは色々と型破りなことをする奴なので、科捜研にいながら刑事の真似事などお手の物だろう。そもそも、科捜研にいると言っておきながら、実は嘘でした、なんてことも十分考えられる。

「いやー、実はですね、この間も僕の頭脳が事件を解決に導いて……最近ニュースで見ませんでしたか？　ほら、あの連続痴漢事件の」

「……あぁ、そういえば何かあったな。ダビデの肉体はもう古いとかどうのこうのと喚いている事件だったか？」

「そうですね。その事件です。あっ、浦……じゃなくて、あの事件の犯人なんですけど、刑務所で、あの肉体をさらに鍛え上げたみたいですよ？」

「そんなことも、ニュースでやっていたな……確か、本場のダビデ像が、そいつの彫刻に置き換えられたんだっけ？」

「そうなんですよ。今じゃもう、彼の肉体見たさに、わざと刑務所に入ってくる人もいるみたいで。有名な彫刻家が何人も、彼をモデルに作品を作っているみたいです」

「おいおい、仮にも警察関係者が、そんな呑気に笑ってていいのか？」

「ははは。まぁ、それもそうですね。犯罪者一人捕まえたのに、新たに犯罪者を何人も増やしちゃ、世話ありません」

　何か笑いを交えつつ、穏やかに会話をしているが、これが藤二がここに来た目的じゃないことは明らかだ。肝心の写真については、全く触れていない。

　俺はお茶を一口啜ると、二枚の写真を指で叩き、聞く。

「で、その話と、この写真は、一体何の関係があるんだ？」

　ついでに、科捜研のお前が何故刑事みたいな真似事を、とも聞きたかったが、それはグッと堪える。あんまり知識があるところを見せると、かえって藪蛇になりかねない。科捜研の警察的権限に関しては、あまり知らない振りをしておく方が賢明だろう。

「いや、特に関係はありませんよ。本題に入る前の、軽い雑談です。あっ、お茶をもう一杯頂けますか？」

　俺は頷いて、急須からお茶を注ぐ。さっさと本題に入れ、と言いたかったが、ここは我慢だ。なにも、焦る必要は無い。まだ、俺が殺し屋であることを決定づける証拠は、どこにも無いのだ。

「で、本題なんですけど」

　お茶を受け取った藤二は、それを少し飲んでから、口を開く。

「この二人のうちのどちらかに、見覚えはありませんか？　ニュースで出てきていたと思うんですけど……」

　俺は一瞬、頷きかけた。

　だが、危ういところでそれを押しとどめる。おっさんからの情報の一つだが、彼女達の名前や顔写真は、まだマスコミには公表されていないそうだ。

　危うくボロを出してしまう所だったと、心の中で冷や汗をかきながら、俺は首を横に振った。

「いや、知らないな。ニュースで出てきたか？」

「あっ、すみません。そういえば、まだ写真は未公表でしたね……やっちゃいました。先輩が、見たことあるわけ無いか」

　なんと白々しい。

　歯から少し舌を覗かしながらペコリと謝る藤二を見ながら、俺は本気でそう思った。可能であれば、頭に手刀を叩き込んでやりたい。

　そこまで思った俺は、一度コホンと咳払いし、気持ちを鎮める。冷静に、冷静に、だ。

だが、これで決定だ。こいつは、俺が殺し屋であるという疑いを持ってやってきた。さっき、まだ公開されていない写真を俺に見せたことから、最早間違いはないだろう。ミスったような態を装っているが、そんなことをやらかすような奴ではない。アルバイトをしていた頃のこいつは、本当に頭が良かったからだ。むしろ、わざとやって、こちらの反応を伺ったと考える方が自然だ。

しかし、そうすると、一体俺はどんなヘマをやらかしたのだろうか。

「えーっと、ですね。この二人は、とあるホテルで起きた殺人事件の、容疑者と被害者です。名前は、須藤響一郎と天瀬響花」

「ふぅーん……悪い、なんだって？」

　さっきおっさんから聞いていたせいで名前については既に驚いていたためか、危うくスルーしかけた俺だが、ここは突っ込んでおくべきことに慌てて気が付く。

「なんか片方は男みたいな名前だけど、それであっているのか？」

「……ええ。合っていますよ。そこに気が付くなんて、流石先輩」

「いや、誰でも気づくだろう。馬鹿にしてんのか？」

　こっそり冷や汗をかきながら、俺はやれやれといった感じで目を閉じる。

　心臓をバクバクさせながらも、同時に俺は察する。藤二が俺に疑いを持ったきっかけは、おそらくアパレル会社の社長が殺害された件だろう。これだと断定するのはまだ早いが、藤二はこの話を遅かれ早かれ持ってくるはずだ。

　俺のこの予想通り、藤二は次のように続ける。

「いえ、そんなことはありませんよ。で、話を戻しますと、彼女達はそれと同時に、とある事件の目撃者でもあります」

　微笑を浮かべながらそう言った藤二は、懐から三枚目の写真を取り出して、俺に見せる。写真に写っていた人物は、やはり俺の予想通り、アパレル会社の社長だった。

　勿論、俺はそれを見ても動揺なんてしない。いや、心は傷んでいるが。ただ、さっき予想したことが起こっただけなので、だんだんと俺の心は平常心に向かっていた。これなら、後は何とか誤魔化せそうだ。

「この人は？」

　俺は首を傾けながら、写真を指で差して聞く。

「都内のアパレル会社の社長です。ええっと、この娘」

　藤二が、殺された女子高生の写真に指を置く。

「こっちの娘が殺された時間、といっても、これは僕が死亡推定時刻から予想したことですが……近くでこの社長さんも殺されたんですよ」

「ふぅーん。ちなみに、殺された娘の名前はどっちなんだ？　ええっと、さっき言った二人の内……なんて言ったっけ？」

「須藤響一郎と天瀬響花ですか？」

　俺は頷く。これは、俺も知りたい情報でもあった。おっさんは、どっちがどっちだか分からないなんてぬかしていたし、警察もまだ詳しいことは分かっていないらしい。それでも聞いたのは、こいつなら何となく、犯人の目星をつけているのではないかと思ったのだ。

もっとも、正直に答えてくれる保証はないのだが。

「……それがですね。分からないんですよ」

　やはりと言うべきか、藤二はそう言って溜息を吐く。

「分からない？　どういうことだ？」

「遺体の身元を特定できるものが、何も残っていなかったんですよね」

「……藤二は、どっちだと思っているんだ？」

　それでも駄目元で、俺は尋ねてみた。

「賢いお前なら、証拠は無くても、殺された女子高生は多分こっちかなっていう予想はしているんじゃないか？　わざわざ、俺にこんな事を話しに来たくらいなんだからな」

　藤二は暫く俺を見つめた後、お茶を一口啜る。こいつが何を考えているのかは分からないが、多分、俺にその予想を喋るかどうか悩んでいるわけではないだろう。この話をした時点で、俺がこの質問をすることは想定済みのはずだ。

　さて、どう出るか……

　俺もお茶を啜り、藤二の言葉を待った。

「……僕は、殺されたのは天瀬響花だと思っています。先輩の言う通り、証拠は何もありませんが」

「へぇ、どうして？」

　これが本当の事かどうかはさておき、俺は取り敢えず聞いてみる。まぁ、あくまでも参考にする程度だ。どうせ後で自分で調べるしな。それに、こいつが言うことも、全部が全部嘘ではないだろう。バレにくい嘘というのは、大抵、嘘の中に本当の事が織り交ざっているからだ。

「天瀬響花と思われる人物が殺された日の夕方、放火事件があったんです。場所は、須藤響一郎の自宅」

「へぇ、そんなことがあったんだ」

　真偽はともかく、これは俺も知らない事だった。

「ええ。まぁ、全部焼けちゃったみたいなので、結局手がかりになりそうな物は何も無かったんですけど」

「家族は？　それに、家を見つけたのなら、近所の人には聞いてみたのか？」

　俺は、浮かんだ疑問を率直に尋ねる。家まで見つけたのなら、どっちが死んだのか、分かりそうなものだ。

　だが、藤二は首を横に振った。

「いや、聞いて回ったんですけどね……それが、名前どころか、顔すら誰も知らなかったんですよ。どうも、あまりご近所の方とは付き合っていなかったみたいです。家族の方は、全員、火事で……」

「……そうか」

　最後の方は言いづらそうだったので、俺は代わりにそう呟いてお茶を啜る。

　多分、この話は本当だろう。よもや、こいつもこんな不謹慎な嘘を吐くやつではないと信じたい。

　ただ、それならそれで、俺の頭には一つの疑問が浮かんできた。

「監視カメラはどうだ？　その娘の家がどこにあるかは知らないが、今時、監視カメラに映らないように行動するのは無理じゃないか？　今時、どこも監視カメラは割と設置されているし。引きこもりならともかく……いや、とあるホテルで殺されたっていうなら、少なくとも外には出たんだろ。調べなかったのか？」

「勿論、調べましたよ」

　藤二は少し頬を膨らませて反論する。なるほど、調べたけど見つからなかったわけか。

「困ったことに、どこにも写っていなかったんですよね。まぁ、須藤響一郎さんの自宅の近くに、監視カメラが少ないっていうのもありますが……」

　それでも、と藤二は言葉を続ける。

「彼女の家から数キロ圏内にある監視カメラをシラミ潰しに探していった所、ここの近くのコンビニの監視カメラに映っていました。殺された方の女の子の姿がね」

「……この近く？」

　不意に、俺の心臓がドクンと跳ねる。この近くのコンビニと言ったら、俺が思いつくところは一つだ。

「はい。先輩がアルバイトしているコンビニです」

　流石に、顔に出ていたらしい。ニヤッと笑うと、藤二はそう言った。

　多分、藤二は気がついただろう。あのコンビニは、俺が殺し屋稼業を続けるための便宜を得ているところだ。オーナーがおっさんの知り合い、もとい元同業者だったらしい。当然、俺も急に仕事が入った時は、バイトの仕事をオーナーに任せて出る。しかも、その割合は中々に高い。もし何も事情を知らない人から見れば、少し不自然に感じるだろう。藤二が疑いを持つきっかけになるには、充分だ。

　とは言え、いくら藤二と言えども、あのコンビニの監視カメラで俺の様子を見ただけでは、俺が殺し屋だとは分かるまい。精々、ちょっと不自然だ、と思うだけだろう。もっと、決定的な何かがあったはずだ。

　俺はお茶を一口啜り、口を開く。

「殺された方ってことは、お前が天瀬響花と睨んでいる女の子か……一応言っておくが、俺はこの娘を見たことはないからな？」

　これは本当のことだ。まぁ、あまりコンビニのバイトに精を出していないので、たとえ来ていたとしても記憶には残っていない。何度も来ている客なら、いくらなんでも顔を覚える。多分、うちのコンビニに来たのは、多くても二、三回といったところだろう。

　なるべく困ったような顔を作っていた俺を見ていた藤二だったが、俺のこの発言を聞いて、フフッと笑った。

「ええ。だと思います。彼女が先輩のいるコンビニに来たのは片手で数えられるくらいしかありませんし、どれも先輩がいない時でしたから。そういえば、来ていたのは、全部休日でしたね」

「……そうか。なら、仕方ないな」

　俺がそう呟くと、藤二はお茶を啜る。

「で、話を元に戻すとですね。そのコンビニを中心に聞き込みをしていくと、どうやら彼女、この近くの高校の生徒みたいなんですよ」

「……おいおい」

　流石に突っ込むべきだろうと、俺は首を傾ける。

「いくら何でも、それは科捜研の仕事じゃないだろう？　いや、俺はよく知らんけども、そういうのは捜査一課の仕事じゃないのか？」

　すると藤二は、少しバツの悪そうな顔を作った。が、それも一瞬で、すぐに不敵な笑みを俺に返し、舌をチョロっと出す。

「いや、まぁ、ちょっとした裏技を……友人から、そこら辺に必要な物を拝借してですね……」

　なんだそりゃ。まぁ、こいつなら当然か。

　俺はやれやれと溜息をついて、額に指を当てた。

「……で？　聞き込みをした後は、何か分かったのか？　当然、その学校には行ってみたんだろ？」

　俺の問いに、藤二はコクンと頷く。

「先生や生徒に聞き込みをしたところ、こっちの娘」

　藤二は、おそらく自身は天瀬響花だと思っている写真に指を置いた。

「彼女は学校で、ひどいイジメを受けていたらしいんですよ」

「そこまで聞き込みをしたんだったら、殺されたこの娘の名前は、分からなかったのか？」

　答えは分かっていたが、俺は聞いた。さっきのおっさんの倅の話を聞いているのもそうだが、「確かな証拠が無い」と藤二自身も言っていたのだから、調べた結果は聞くまでも無い。

「先輩も意地悪ですね」

　そう言いながらも、藤二は微笑を浮かべていた。お茶を一口啜ると、続ける。

「誰も、覚えていませんでした。まぁ、今まで彼女の名前を推測した名前で呼んでいたので、聞くまでも無いでしょうが。結構深いところまで調べたんですけど、学校を運営するのに必要な書類が何枚も欠けていて、結局分からずじまいでした」

　やれやれと肩を竦めて、藤二は続ける。

「全く、信じられない話です。先輩もその学校に行けば分かると思いますけど、あまりいい学校では無いですね。偏差値もかなり下のところに位置していますし、生徒も不良ばっかりでした」

「別に偏差値なんて、ただの数字だろ……で、その後は？」

「……まぁ、名前は分かりませんでしたが、有益な情報が一つだけ」

　そう言うと、藤二はもう一人の女子生徒の写真に指を置く。俺はお茶を啜って、次の一言を待っていた。

「天瀬響花と思われる女子生徒には、友達がいたようです。それが、この娘。僕が須藤響一郎と睨んでいる生徒ですね」

　まぁ、おっさんの倅が知っているみたいだから、これくらいの情報はこいつも楽々掴めるだろう。

「友達の方も、誰も名前を覚えていないのか？」

　俺が聞くと、藤二はコクンと頷く。ほんと、嫌な学校だな。

「顔は見たことあるみたいですが、二人は互を『きょうか』と呼び合っていたみたいですから、他の生徒は、どっちがどっちだかよく分からなかったみたいです」

　そう言うと、藤二はお茶を一口啜った。

「ただ、割と仲は良かったみたいですよ？　須藤響一郎と思われる娘も、天瀬響花ほどでは無いにせよ、あまり周りはいい印象を持っていなかったみたいですからね。嫌な思いをしたことも、一度や二度では無かったと思います。そういう所で、互いに共通点があったのでしょう」

「……一体、どういう経緯で、お前が天瀬響花だと睨んでいる娘は、須藤響一郎に殺されたんだろうな」

　俺は、自分でも分かる位しんみりとした口調で呟いた後、お茶を啜ろうとした。だが、既に無い。

　俺がお茶を注いでいる間、藤二は俺を黙って見ていた。注ぎ終わった後、俺は再びお茶を飲む。ほのかな酸味の後、強い苦味が襲ってきた。

「藤二、一ついいか？」

　入れたお茶を半分位飲み干した俺は、今尚沈黙を保っている藤二に尋ねる。ふと、沸いた疑問だった。

「お前は、天瀬響花を殺したのは須藤響一郎だと思っているみたいだが……そう思ったきっかけはなんだ？」

　ここまで話を聞く限りだと、俺はむしろ、被害者と加害者は逆ではないかと思っていた。

「人間の活動範囲を考えれば、たかがコンビニに行くのに、わざわざ自分の生活の範囲から外に出るとは考えにくい。学校の通学路の途中ということも考えられるけど、イジメにあっていたんなら、それもどうだろうってところだ。俺なら、休日に学校の近くには寄らないからな」

　ここで俺はもう一度、お茶を啜った。

「家がどこにあるのかは知らないが、お前は須藤響一郎の自宅から、俺のアルバイト先を見つけたんだろう？　なら、お前が見つけた彼女は、須藤響一郎と考えるのが自然だ。捜索の範囲を徐々に広げていったんだろうから、須藤響一郎の自宅は、案外この近くなんじゃないのか？」

「ええ。先輩の言う通りです。まぁ、近くと言っても、彼女の自宅は少し向こう側にありますからね」

「放火の話は初耳だったからな。多分、ちょっとは離れているだろう……で、話を戻すと、だ」

「一応、補足しておきますと、天瀬響花の家は、この近くにはありませんでしたね。どこにあるかは、分かっていません」

　藤二が、これから俺が質問しようとしたことについて、先に答える。さっき言った、書類がどうのこうの、というやつなのだろう。これは、俺も後で調べなおすのは苦労しそうだ。

　心の中で、ウヘェという顔をしながらも、俺はさらに続ける。

「そうか……なら、なおさらだな。この近くに須藤響一郎の家があるなら、俺がその娘を見たら、間違いなく須藤響一郎だと思うぞ？　と、いうことは、殺されたのも須藤響一郎だろう。お前が、彼女を天瀬響花だと思ったのは、どうしてだ？」

　俺がそう尋ねると、藤二は暫く黙っていた。そして、一口お茶を啜る。

「そうですね……」

　重苦しく口を開く藤二。どうも、かなり悩んでいる様子だ。こんな顔を見るのは初めてだった。何か新鮮である。

　思わずニヤケそうになるのを必死で堪えるために、俺もお茶を飲んだ。

「いえ、最初は先輩と同じことを考えたんですけどね……僕には、須藤響一郎の自宅が燃やされたのが引っかかるんですよ」

「なるほど」

「おそらく、あの放火とホテルでの殺人事件は無関係じゃないと思うんですよね。で、そこから考えた結果なんですけど、放火の犯人は十中八九、天瀬響花だと思うんです」

「まぁ、自分で自分の家を燃やすような奴はいないだろうしな」

　まさか、という意味合いを込めて言った俺の言葉に、藤二は頷く。

「ええ。僕もそう思います。その点については、先輩に賛成です。それで、天瀬響花は、学校でひどいイジメを受けていた訳でしょう？」

　今度は、俺が頷く。なんとなくだが、藤二の言いたいことが分かってきた。

「そういう場面を目撃した、という話は無いんですけど、僕は須藤響一郎が、天瀬響花をいじめていたのではないかと思っています」

「味方の振りをして、実は裏でこっそりと……ってか？　いくらなんでも、発想がひねくれすぎだろ」

　俺には理解できなかった。友達の振りをして、いじめのターゲットに近づくとか、人間のやることとは思えない。

　ただ、もしもそれが本当だったとしたら、天瀬響花の受けたショックは計り知れないだろう。

「仮にそうだとしたら、天瀬響花が須藤響一郎への報復として、家に火をつけるも無いわけじゃないのではないでしょうか」

「で、それに怒り狂った須藤響一郎が、天瀬響花を殺したってわけか？　でも報復なら、家に須藤響一郎がいる時を狙うだろ。あ、いや。でも、命を奪うつもりまでは無かったのか……？」

　俺の呟きに、藤二は頷く。

「流石に学生に、人を殺す度胸があるとは思えません。イジメは深刻なものだったでしょうし、友達に裏切られたのもショックだったでしょうが、それが人を殺す理由になるかと言われると……」

「家が燃やされ、家族も殺された、っていう方が、殺人の動機としてはありえるな」

「ええ。家に火はつけたものの、本人の予想以上に火が大きくなり、最終的に手がつけられなくなってしまったのではないですかね？　と、言うことは、殺された死体は天瀬響花ってことになりませんか？」

　そう言われると、俺も頷くしかない。まだ引っかかる部分は少しあるが。例えば、それならわざわざホテルに連れ込む理由はなんだ、とかだ。計画殺人ならともかく、今の理由なら、殺意は衝動的なものだろう。完全犯罪のために、ブティックホテルに連れ込もうとする思考までたどり着くとは思えない。

　まぁ、ここら辺は全て、須藤響一郎が天瀬響花をいじめていた、という藤二の予想が正しければ、の話だが。

　藤二も、そこら辺は分かっているらしい。

「一応、僕の友達に刑事がいるので、僕の予想の裏を今とって貰っているんですけどね」

　弱々しく微笑みながら、藤二はそう呟いて、お茶を啜った。そして、少し目を閉じて口を開いた。

「ただ、何かしらの理由は、あると思うんですよ。まさか、何も無かったのに、いきなり殺意が芽生える訳がありませんから」

「まぁ、そりゃそうだが……例外もいるだろうよ」

　俺はそう言って、ほぅ、っと息を吐く。最後の方は、言葉になっていたかどうかは分からない。そういえば、一体何の話をしていたんだったかな？

「で、話は最初に戻るんですけど」

　言葉は聞こえなかったようだが、俺のその思考を見透かしたように、藤二が言った。そして、アパレル会社の社長の写真を指で差す。

「先輩は、この人に見覚えはありませんか？」

「無いな」

　自分で殺しておきながら即答するのも何か嫌だったが、その思考を無理矢理押し沈める。

「……そうですか。いや、僕がここに来たのは、この事件の聞き込みをするためなんですよね。いや、大分色々と話し込んじゃいましたが」

　そう言って微笑を浮かべた藤二だが、それが目的じゃないことははっきりしている。

「ちなみに、死亡推定時刻は、今から二ヶ月程前ですね。死亡した場所は、最初にも言いましたけど、天瀬響花が殺されたホテルの近くです」

「そもそも、天瀬響花が死んだホテルの場所を知らないから、それについては、だからどうしたってところだ」

　きっぱりと俺はそう言って、お茶を啜った。

「ホテルの場所は、ここから少し離れているんですけどね。須藤響一郎の自宅のあった場所から、割と近いところです」

「なら、なんでこんな所まで聞き込みに来ているんだ？　聞き込みなら、そのホテルの近くでやれ。そっちの方が情報あるだろ」

　藤二は、その俺の言葉に頷いた。だが、続けて首を横に振る。

「そこら辺は、別の捜査員に任せますよ。僕は直感で、こっちの方が何か収穫がありそうだと思っただけです」

　それが本当なら、なんという直感だろうか。今まさに、彼を殺した犯人が目の前にいるわけだからな。ちょっと背筋が寒くなる。

　だが、さっさとこいつを追い出そうと、俺は次の言葉を発してしまったのが、運の尽きだった。

「こんなところに情報なんかあるか。さっさと帰って、捜査に戻れ」

「あっ、じゃあ、先輩も来てください」

　途端に凍りつく俺。こいつは一体、今何を言ったのだろう？

「来てください……って、なんだ？」

「言葉の通りですよ。先輩も、僕の聞き込み調査を手伝って下さい。どうせ、暇なんでしょう？」

　満面の笑みを見せる藤二に、俺はただただ手を引かれていった。気が付けば、家の外だ。

「……は？」

　俺の吐いた息が、白く曇った。

友達(？)

　ここは、どこだろう？

　私、伊藤まゆみは、そう思った。背中が柔らかい。オトメユリの香りが心地いいものの、胸につく不安が拭えない。

「ええっ……と」

　出てくる声も掠れている。

　頭はどうにか正常に動くし、視界もだんだんとはっきりとしてきた。どうやら自分は、今まで寝てしまっていたらしい。

　何があったのか、記憶をたどってみる。確か、勇気と別れた後、女の子と出会って、ハンカチを拾って……

「……ああ」

　その後、ハンカチを拾ってあげた子が、わざわざ家まで来てくれて、それからお礼を言われて……

「……ええっと」

　その後、その子を家に上げてから……

「一緒にお話し、したんだっけ？」

　少しずつ、記憶がはっきりとしてきた。そういえば、あの女の子と、他愛もない話をしていたはずだ。どんな話をしたのかは思い出せないけど、途中で女の子がコップを倒しちゃって、中のオレンジジュースがこぼれたんじゃなかったっけ？

「あっ、私のスマートフォン……」

　そうだ。ジュースが私のスマートフォンに掛かって、あの子が青ざめて必死で謝っていたんじゃなかったかな？　事故だから仕方がない、って言ったけど、あの子は自分が弁償するって聞かなかったなぁ。

「で、確か私は……」

　取り敢えずこぼれたジュースをなんとかしようと、雑巾を持ってきて、それをあの子と一緒に拭いたところまでは覚えている。

　その後を懸命に思い出そうとするけど、頭の中に靄がかかったみたいで、うまく記憶の形が見えてこない。ぎゅっと目を瞑っても、靄は晴れなかった。

「……あれ。あの後私、何をしたんだっけ？」

「コップに、ジュースを注いでくれたんですよ」

　不意に、足の方から女の子の声が聞こえた。見下ろそうとした私だけど、上手く体が動かせないことに気が付く。

　ここで初めて、私は仰向けで横になっていることに気が付いた。

「で、まゆみさんも自分のコップにジュースを注いで……」

「あっ、そうだ。私もそれを飲んだんだっけ？」

「はい。で、コロン、と眠っちゃったんですよ。寝顔、とても可愛かったです」

　女の子に言われ、ようやく霧が晴れた。でも、スッキリしているはずなのに、胸につく不安は募るばかりで、一向に消えない。

「……あの」

　上半身を起こそうとしたけど、全然起こせなかった。

　それでも私は、まだ思い出せないことを聞くために、声を振り絞る。

「あなたは、誰？」

　さっきまで聞いていた声のはずだった。なのに、声の主の顔は思い出せるけど、名前が全然出てこないのだ。

「私ですか？」

　ふと、さっきまで聞いていた声と、違う声が聞こえた気がした。

「私の名前は――」

【続く】

　　　【あとがき】

　お久しぶりです。Puney　Loran Seaponです。まさかの中巻です。最初の藤二達の会話が思った以上に伸びまくって、あっという間に制限ページ数ギリギリになってしまいました。まだ一ページ余裕がありますが、きりのいい所で次回へと続きます。まさかの中巻なので、細かい話はまた今度にさせて下さい！　すみません！

　尚、この話の前編は、電子書籍に載っています。が、なんと、私のホームページでも読めちゃったりします。(前編を読むだけなら、電子書籍で読む方をおすすめします)

　今ググって検索できるようには申請していますが、まだ無理なので、ここにＵＲＬ書いておきます。是非、覗いてみてください。ちなみに、これはクロスオーバー作品で、元となった作品の一部はこっちでしか読めません。

　ＵＲＬは（すみません、サイトにアップする上で問題があったので、削除しました） です。ホーム真ん中ちょい上の『部活投稿作品』のコンテンツをクリックして、読みたい作品をダウンロードしてください。ワード形式で、ダウンロードできます。それでは、また。